様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5　月　20　日現在

機関番号：34416
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21530671
研究課題名（和文）
関係性の構築・維持を支える普遍的メカニズムの研究
研究課題名（英文）
A study of universal mechanisms for formation and maintenance of social bonds
研究代表者
遠藤　由美（ENDO　YUMI）
関西大学・社会学部・教授
研究者番号：　80213601

研究成果の概要（和文）：人々がどのように親密な関係を結び・維持しているかについて、社会的移動性が低い伝統型人間関係を維持している鳥羽市答志地区で聞き取り調査を、また現代型人間関係としてインターネット上で交流するSNS参加者を対象としWEB調査を実施した。その結果、どちらも対面を基本として親密関係が形成・維持されていること、関係相手の選択権の有無や初期の好意感情は必要条件ではなく、むしろ相互扶助を必要とする生態学的必然性が影響力をもつことが判明した。

研究成果の概要（英文）：We examined how people construct and maintain their close social bonds by picking two different type of communities; a traditional small village in an isolated island in Ise Gulf, and a modern virtual community on internet. In concrete, we interviewed more than twenty interviewees in the former study, and we performed web surveys on SNS (mixi) users. The results revealed that close relationships are likely to be formed and maintained through face-to-face interactions, and strongly influenced by ecological social necessity of mutual support, but least influenced by positive affect at the beginning of the relationships.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2009年度 | 1,900,000 | 570,000 | 2,470,000 |
| 2010年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2011年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,500,000 | 1,050,000 | 4,550,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：社会的相互作用・対人関係

１．研究開始当初の背景

国内外において人間関係の希薄化が指摘され（例：Putnam, 2006）、それはしばしば嘆きの口調で語られる。そして、中央政府を旗頭に、社会的絆を人為的に現代において「復活」させ強化しようとする政策が模索されている。その根底にあるのは、親密な人間関係を全面的によいものとし、「社会的関係資本」として位置づけようとする態度である。しかし、以下の２点を考慮する必要がある。第１に、社会とそこで繰り広げられる人間関係は相互に結びついており、社会の変化から切り離して人間関係だけを論じることはできない。社会変動は一挙に均質的に進行しな

い。また個人においてもある部分は新たな親密関係の有りようを示し、他方別の面では従来には存在しなかった様式での親密交流を行うなど、重層的多層的である。したがって、親密関係とそれが成立している生態学的条件の双方を俎上に上げた研究が求められる。

第２に、親密な対人関係は well-being の促進要因であることが指摘されているが、他方親密関係の形成・維持にはリスクやコストを伴う。そしてそのリスク・コストは、社会的流動性の低い社会と、流動性の高い社会では異なると考えられる。それゆえ、流動性の高い社会での親密関係と低い社会での親密関係を典型として取り上げ、得ているものとコスト・リスクを視野にいれつつ親密関係の結び方を検討し、普遍的本質的意味と機能を何かを探ることが求められる。

２．研究の目的

こんにちの社会・個人に混在している多層な人間関係の中から１つの典型として流動性の低い社会における慣習に基づく伝統型人間関係と、流動性の高い社会においてコミュニケーション・テクノロジーを用いて多様な人々と交流する現代型人間関係を取り上げ、そこでの関係性の有りようと維持のプロセスに目を向けてコスト・ベネフィットの面から固有な特性と共通性を検討し、心理的結びつきとしての関係性にリアリティを与え実体化する普遍的メカニズムを明らかにする。また、well-being の資源となりうる人間関係を積極的に構築し社会的環境の最適化を図るそのメカニズムを明らかにする。

３．研究の方法

(1) 伝統型人間関係：研究代表者と連携研究者１名で、2009 年から 2011 年にかけて合計６回、三重県鳥羽市答志島答志地区を訪問し、その都度数名に対してインタビューを、約１時間程度実施した。協力を得られたインフォーマントは合計 23 名であった。またインタビューの他、小学校運動会や祭り、漁港を訪問観察し、地域の特性を把握することにも務めた。

(2) 現代型人間関係：最も利用者が多い SNS として mixi を選択し、2010 年に首都圏の 20 歳～39 歳(40 歳以上は SNS 利用が少ない)の男女約 1271 名に調査会社に WEB 質問調査を依頼して、また職の有無との関係を検討するため首都圏で同世代の無職者に限定した調査を 2011 年に実施した(N=300)。主要な調査項目は、性別・年齢・職業地位、居住形態などの個別情報、対面での交流頻度や人数、mixi 上の交流の頻度や人数、交流相手との親密度、交流目的、人間関係満足度、人生満足度、交流の主観的評価など多岐にわたる。

４．研究成果

(1)伝統型人間関係

かつて日本の各地にあった若者組は日本の近代化とともに急速に消滅し、現在鳥羽市答志島答志地区にただ１つ、寝屋子として残るのみとなった。寝屋子とは、「戸籍上の兄弟ではないものどうしが、終生、兄弟以上の付き合いをする制度」（鳥羽市広報「とば」，1991）であり、無形民族文化財に指定されている。答志では、長男が家業を継いで島に残り、中学卒業後数名で、親が決めたよその家の寝屋子となり、26 歳または結婚するまで寝屋親宅に随時寝泊まりする。寝屋子は一度組むと「卒業」後も朋友会を結成し仲間として、また寝屋親に対しては義理の子どもとして、冠婚葬祭など暮らしのさまざまな局面で生涯にわたって助け合う。

①答志の生態学的条件と相互扶助の必要性

答志は潮の流れが速い伊勢湾の入り口に位置し、主たる産業は漁業および水産加工業である。技術進歩により船体やレーダーの性能が増した今日では減少したが、以前は転覆転落などの場合に、無条件で必ず人命救助にかけつける若者が必要であった。また前は海、後ろに山を背負った離島の地理的条件により、地区内は道路が狭く現在でも自動車が入り込めない。そのような条件下では、普請、葬儀など暮らしの中で折りにつけ、湾岸沿いの幹線道路から人力による運搬が必要となり、助け合いに依存しなければならない。ここから、答志の生態学的条件と相互扶助が固く結びつき、共同体が社会的絆を必要としていることが伺える。

②生涯続く簡単に切れない関係

親から割り当てられることから始まる寝屋子の対寝屋親・対寝屋子との関係であるが、そりがあわずうまくいかない場合にも、関係から抜け出すことは困難である。ひとつには、１人の人間が所属する集団は複数あり、寝屋子を抜けたとしても、他の役割（例：消防団）でつきあうことになるという重複性がある

（図１参照）。また寝屋親が自分の実親の寝屋子仲間であったり、寝屋親からすると実子が寝屋子に行っている家の長男を寝屋子として預かるなど、幾重にも関係の糸が張り巡らされており、交流ネットワークから逃れることは困難である。

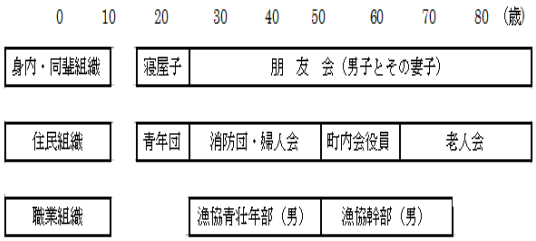


図１　答志における組織と役割

社会科学においては一般に、親密関係とは親子など血縁関係がある場合、さもなくば恋人や親友のように好意愛情によって結びついた関係にある場合をいう。そして関係を結んでいることそのものが報酬となるような関係は「純粋な関係」と呼ばれ（ギデンズ, 1995)、本人が誰と親密関係を結ぶかについての意向や意思が尊重され近代の民主化された関係であると受け止められている。

それに対して寝屋子は親からの指示による加入であり、伝統や慣習に基づき本人の意思・選択はまったく考慮されていない。実際、答志に育った長男は、ある日突然親の指示で、他人の家に「寝に行く」わけであるが、生涯組み込まれつき合うことになる寝屋子への加入を「当たり前」「自然とはいとって」ととらえ、その日から他人と「もう一つの家族」になることに当然だとみなしている。

しかし、好意や愛情などがないわけではない。「実の親には言えないことも何でも言える。気兼ねなんかない」ほどの信頼感と親密感情が同じ屋根の下に寝泊まりするうちに芽生え、自分の寝屋子仲間は他とは「全然違う」「特別」な関係として自覚的に自分の人生の中心を占める位置に据えるようになる。

③安定的親密関係とアイデンティティ

多くの場合、（義理の）親子・きょうだいの結びつきが結成された後、我々は「〇〇寝屋子」という集団アイデンティティを基盤として交流がなされ、次第に親密感情が醸成されていく。中には、円滑な感情交流に困難を感じるケースも稀に存在するようであるが、その場合にも、関係自体を解消することはない。したがって、人々は寝屋子とその後続の朋友会から排除される可能性を想像することなく、親密関係の永続性を信じることができ、安心感安定感を得ることができる。これは、自己の統一性・一貫性の感覚を強くもたらすだろう。また、生涯変わらぬ同じメンバーに囲まれたまま星霜を重ねることにより、自分の過去から現在までの記憶を仲間と共有していることになり、そのような他者からの変わらぬ働きかけを通して、一層自己の統一性・一貫性感覚が堅固なものになる。

④寝屋子を中心とする親密関係の意味

このように、社会流動性の低い地域での生態学的条件に適合性の高い慣習としての親密関係は、暮らしに必要な相互協力を要求・提供するだけでなく、仲間であり続けることが保証されている安心をもたらし、さらには自己統一性・一貫性の感覚アイデンティティを堅固なものにしていく。

他方、集団凝集性を妨げるような行為は決して許されず、個人の自由という概念と両立しにくい面があることは否めない。今日、「社会的絆」が賛美される風潮が見受けられるが、親密関係が成立・持続するための条件、利得とコストの両面を視野にいれた検討が求められる。

(2)現代型人間関係

まず大都市圏の大学生を対象とした予備的調査によって、mixi 利用者の多くにおいて、実際に対面で会う他者との交流と mixi 上での交流がほぼ重なり合うこと、つまり実際に会って話す他者と mixi でも交流しているケースが多いことが確認された。

ここでは、大学生の特殊性を克服するため、20 歳～39 歳までの首都圏のヤングアダルトを対象にした。主要な目的は、職場が成人にとって親密関係を築く場となっていること、そしてそれがない場合、インターネット上の交流機会がどれほどそれを補完しうるかを検討することであった。

交流相手の人数など量的側面では、実社会での交流範囲、インターネットを介した交流範囲どちらにおいても、無職者は有職者よりも狭い（表１）。またインターネット介した交流相手は、大学生の予備調査結果と同様、その多くが実社会でも交流する他者であり、インターネットを利用することによって時間・空間を超えた未知の他者との新たな交流

というものはほとんどおこなわれていなかった。無職群が実社会においても mixi 上においても親密関係他者が少ないのは、元来親密関係世界の小さい人が職を得られないあるいは離職傾向が高いということも考えられる一方で、職場での交流機会が絶たれること、また無職という地位から来る自信低下が少なくとも理由の１部として背後にあると考えられる。

表１　職業地位別平均値

| | 有 職 | 無 職 | |
|---|---|---|---|
| 携帯電話登録数 | 132.82 | 77.31 | *** |
| 重要なことを話せる人の人数 | 3.85 | 3.05 | ** |
| Mixi 上気を許せる人の人数 | 6.03 | 4.63 | * |
| マイミクの特に親密な人の人数 | 4.61 | 3.89 | + |

Note:+ p<.1, * p<.05, ** p<.01,*** p<.001

さらに mixi 交流活動を分析すると、無職群は有職群に比べて mixi へのアクセス頻度が有意に高く、参加コミュニティ数も多い。しかし、熱心に交流しているように見えながら、マイミクの最も親しい人に対する親密感は有職群に比べて低く、仲間から排除される可能性を考えて怖れを感じている（表２）。

表２　職業地位別平均値

| | 有 職 | 無 職 | |
|---|---|---|---|
| マイミク他者親密感 | 3.08 | 2.95 | * |
| 重要人物人数 | 3.85 | 3.05 | *** |
| 仲間はずれ恐怖 | 3.17 | 3.32 | * |
| 人間関係良好 | 3.52 | 3.13 | *** |
| 人生満足度 | 13.28 | 10.43 | *** |

Note: * p<.05,*** p<.001

無職群は実社会での face-to-face 交流を相対的に苦手とする傾向が見られ、インターネットを介した交流の方が「対等な人間関係をもてる」「自分を理解してもらいやすい」と回答している。これは現実の人間関係を積極的に展開することを回避し、インターネット上交流へより重点をかけることを示唆しているが、時間や空間を共有しながら共鳴しあう関係が弱体化しているためか、親密感を高められず、自分が仲間の一員であることに確信を持ちきれずにいるのかもしれない。翻ってこのような不安が、一層親密な他者への欲求を高め、インターネット交流相手を求めて頻繁にアクセスし、いろいろなコミュニティに参加する傾向を生み出しているのかもしれない。

無職群は well-being 指標の健康や人生満足度において有職群よりも低いが、これは単に収入面において不如意だというだけに留まらず、それが自分への自信のなさひいては自分の人間関係を十分肯定的に評価しきれず積極的に展開できないという事態とつながっているようだ。

インターネットを介する交流は、孤独な人を救うかのような指摘がなされているが、少なくとも実社会での対人関係の代替・補完という機能を十分果たすものではないようである。

(3)まとめ

答志地区における伝統型人間関係と大都市圏でのインターネットを介した現代型人間関係の検討をおこなった。両者は研究方法そのものが異なるため、安易に比較することは戒めなければならない。しかし各調査から、親密な対人関係の基本は対面で交流することにあること、移動性が高く周囲の他者が短期間で入れ替わるような環境において、大勢の中から愛情を基礎とする親密関係を築き維持しようとすることには多大なコストが必要であり、また他者も交流相手選択権をもつことから、不安が高くなり SNS などで相手の動向を探るなど確認過程を伴うようになること、しかしどちらも交流でありながら、この確認過程はいわゆる関係を深め絆を強める過程とは異なるかもしれない、と考察される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計３件）
日本心理学会第 75 回大会　ワークショップ 2011.9.17.　日本大学
①Social networking における自由と不自由：Mixi に向かうとき　　遠藤由美
②答志島寝屋慣行の維持と変容　村本由紀子
③コミュニティにおける社会関係資本：社会的絆の生成と維持　　内田由紀子

６．研究組織
(1)研究代表者
遠藤　由美　（ENDO　YUMI）
関西大学・社会学部・教授
研究者番号：80213601

(3)連携研究者
村本　由紀子（MURAMOTO YUKIKO）
東京大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00303793
（2011.10　所属変更）
内田　由紀子（UCHIDA　YUKIKO）
京都大学・こころの未来研究センター・准教授（2011.4　職位変更）
研究者番号：60411831
柴内　康文（SHIBANAI　YASUFUMI）
同志社大学・社会学部・准教授
研究者番号：60319457